

もし廣く計畫經濟思想史と言つたものを書くとするれば、現在こそ最もそれに相應はしい時期だと言へよう。そしてその思想史の一節として、遠くプラトンの共和國やモーアのユトーピヤと一緒に、ファイヒテの封鎖商業國を組入れることも動かぬところであらう。現代の計畫經濟思想がさうであるやうに、これらの書物に盛られた思想は何れも、それぞれの時代の典型的な社會批判であつた。それ故にこれから書かるべき計畫經濟思想史は、總じて計畫經濟思想の一義的な發展を跡づけることをその課題とすべきではなく、反對に、それぞれの計畫經濟思想の歴史的特殊性を明かにすることによつて、逆に現代におけるこの思想の具體的性格を理解することを、その課題とすべきであら

書評

出口勇藏譯

ファイヒテ『封鎖商業國家論』

高島善哉

う。ファイヒテの計畫經濟思想もこのやうな思想歴史の一環として復興さるべく、それ以外の仕方でも復興さるべきではない。

だから本書を読む興味の第一は、哲學者ファイヒテの社會經濟批判に集まる。先驗的觀念論の王座を占めながら、ファイヒテには社會生活の物質的側面は決して無縁のものではなかつた。けれど彼は素々第四階級の生れであつたから。しかし彼が封建社會の土臺下から自由なる文化の最高層まで攀ぢ登つたやうに、自由の理想主義者であつたファイヒテには、物質的なもの、感性的なもの、自由なる理念の實現の足場に外ならなかつた。社會經濟に對するフマニスト的超越性は、即ちファイヒテの倫理的目的論と端的に相表裏するものである。成程こゝにはロマンテカーを特徴づける物質的なものへの高踏性や無關心はない。一である理性は存在のあらゆる高みと深みとを貫いてゐる。プラトンの共和國が、治者と騎士との二つの階層の下積みとして、僅かに物質的生活に携はる社會層を置いたのに對して、正にこの「物質的」社會層そのものの配置と序列を圖象化するものがファイヒテの理性國家であるのである。しかしそれにも拘らず、この理性國家が全體としては、自由への感性文化の領域としてのみその意味を興へられ、それが結局において、倫理法則充實のための、——必然的ではあるが——媒介と見られてゐる

ことに變りはない。かやうにして人は、このフィヒテについてもなほ、經濟的現實感の貧困を歎じた若きアダム・ミュラーの感傷を新にすることであらう。けれども本書における經濟的現實感の貧困は決してその社會批判の重要さを減殺するものではない。フィヒテは、その理性國家に封鎖商業國なる名稱を與へることによつて端的に彼の社會批判を表章化した。それは反資本主義的態度の表現であると共に、排外的な、特に反イギリス的態度の表明でもあつた。何となれば、哲學者フィヒテの眼には資本主義一般が商業資本主義として映じ、しかも同時にそれが恐らくイギリス資本の進出と結びつかざるを得なかつたからである。かくして「取引と營業との自由」のみを求めて「嚴密な規則性ある事物の進行」を嫌ふ態度は「輕浮なる生活態度」として斥けられ、そこに「現代の一つの特徴」が求められる。自由主義はマーカントイリズムと共に、罪の完成期としての現代を導き出した直接の動因として把握せられる。かくして商業資本の破壊的影響から抜け出すことが問題であつて、その破壊運動の持つ機構的質性や歴史の必然性は初めから問題とはなり得ない。そこで商業資本主義の内包的契機として特に利己心と貨幣と外國貿易とが取出され、その代りに嚴密に統制されたる計畫經濟と國內貨幣の創設と外國貿易の封鎖とが要求され

る。アダム・スミスに見る市民社會に内在することによつてではなく、それに對抗することによつてこれを超越しようとするのだ。フィヒテの資本主義批判は、かくして次第にロマンティックのそれに接近するのである。

封鎖商業國家論第一部は哲學と題して、若干の根本命題より理性國家の構成を演繹してゐる。しかし理性國家の構成が如何に演繹的に必然であつたとしても、その中味は歴史的に規定されたものであり、また全體として右に述べたフィヒテの社會批判的態度に制約されてゐることは言ふまでもない。その點で我々はケネーと、その經濟表との關係を思ひ浮べることもできよう。けれども正にケネーにおいて特徴的であつて市民社會の正密的把握は、自由理想主義的生活態度の峻嚴さのために犠牲となり、フィヒテの理性國家は均衡と調和を重んずるロマンティックの氣持をそのままに具現し、人をして中世都市經濟の復活であるかとさへ思はしむるに至つた(マリヤンヌ・ウエーバー)。けれども勿論この解釋は行きすぎであらう。それは理性國家において貨幣問題が特殊の重要さを有するところから見ても知られる。要はフィヒテが——ヘーゲルとは違つて——市民社會に十分に内在することを知らなかつた——また、できなかつた——結果と見るべきであらう。しかし市民社會への内在の不十分

さといふことで、ファイヒテとロマンティカーとは共通するにしても、何よりも先づロマンティカーには政策がない。そこに理想主義者ファイヒテの特殊性がある。封鎖商業國の第三部政策篇が、たとへ第一部哲學篇の技術的適用にすぎない憾みがあり、そこに本來の意味で政策と言ふべきものが見當らないとしても、それが第二部歴史篇と並んで三位一體の構成を持つてゐることは特に注目されなければならぬ。ファイヒテの歴史は、こゝではまだ「因果問題の發生的解答」といふ程度を多く出でず、結局商業資本主義の破壊の一面を強調したにすぎないのであつて、こゝでもロマンティカーとの差異は明かである。ファイヒテにおいては、理論と歴史と政策とが有機的に統一される代りに、歴史と政策が理論に奉仕し、第一部の哲學篇のみ獨り先驗的妥當性を擅にするかの如くである。しかも形式としての理論の先驗的演繹は、内容として實踐的哲學者の主體的意欲を表示するものに外ならなかつた。換言すればファイヒテの餘りに強烈なる主體性は理論と歴史と政策との具體的統一を妨げたと言ふべきである。ファイヒテの實踐が結局單なる政治的實踐として、しかも國民教育として、哲人政治として、一つの文化主義的マキャベリズムとして終らざるを得なかつた理由がこゝにある。「自由は下から、改革は上から」を説いた自由の理想主義者フ

イヒテは、この意味でもプラトンと一脈相通するものがないであらうか。

ファイヒテの封鎖商業國家論は、ドイツ觀念論哲學の一所産として永く讀まるべきものであらう。けれどもこれを過當に評價してはならない。本書がその全き意義を有し得るのは、これをその思想史的聯關において見たときである。ファイヒテは十八世紀と十九世紀との兩つの面貌を持つ「ヤーヌスの頭の所有者」(ウィンデルバント)であつた。恰もこのやうな「ヤーヌスの頭」の表徴として最もファイヒテ的なるものと見えるのがこの小冊子一巻であらう。人はこゝに啓蒙の封建制批判とフランスの社會思想と、イギリスの經濟的知識と最後にドイツ・ロマン主義思潮との一見矛盾に充ち滿ちた交流を見出すであらう。ファイヒテの思想的力點が十八世紀より次第に十九世紀に移動して行つたものとすれば、世紀の轉期(一八〇〇年)に現はれた本書のうち、かやうな思想の交流と推移が織りなされてゐることも故なしとしない。ファイヒテは即ち、個人の生存權とか勞働權と言ふやうなバブーフ流のフランス社會思想と、社會契約といふルソオ流の社會認識形式とを巧に併用しながら、封鎖商業國家論を始めた。各人に各人のものを得せしめ、人間らしき生存を保證するといふ根本命題から出發し、これを可能ならしめ

るものとして財産契約、防護契約及び結合契約なる契約觀念を利用しつゝ、國家の觀念を規定する。しかも思索が一度物質的生活に觸れるや否や、忽ち全體主義的思想様式が顯著となつて來た。元々個人の生活のために結ばれたその國のために、逆に個人が奉仕し、個人が全體の秩序と強制に服従すべきことを要求するに至つた。感性文化の世界においては我々は先づ民族であり、國民であることを要求されるに至つた。かくして學問や藝術以外には人類そのものに直屬するものは一つも存在しなくなつたのである。このやうに個人主義から國家國民主義への移行は餘りに目に見えて鮮かであるので、人はこゝにフィヒテにおける個人主義と國民主義又は社會主義との矛盾を認めた。けれども、この矛盾がたとへフィヒテにとつての宿命的矛盾であるの外はないとしても、この矛盾の特殊性をさらに立入つて吟味する以外には、フィヒテを理解する方法はないであらう。

封鎖商業國家論は時論風の一論策であつて、それは「自然法の基礎」即ち、フィヒテの法哲學の一附論にすぎない。然るに「自然法の基礎」は言ふまでもなく知識學の原理によつて書かれてゐる。それ故に封鎖商業國家論において形式として自然法的思想が混入することは必ずしもフィヒテの矛盾と見るべきではない。人は直ぐさま知識學そのものがロマンティカーの聖典と

なり得た消息を偲ばなければならない。しかしフィヒテの倫理的目的論や意志のテレオロギーがシェリングの同一哲學と別物であつたやうにフィヒテとミュラーとの間には到底相容れないものがあつた。それ故にフィヒテにおける十九世紀的なるものは、例へばもつとロマンの色合ひの濃い後年の「ドイツ國民に告ぐ」においてさへ、十八世紀的なるものと全き和解にもたらされたと言ひ得ないであらう。再言すれば、フィヒテはルソオの自然の中に倫理法則を進出せしめることによつて、機械的——量的個人主義の見地を脱却したけれども（自然法の基礎）正に社會の認識を倫理主體から始めることによつて、倫理主體それ自身が自己を社會的なるものによつて媒介しなければならぬといふ矛盾に當面した。しかもフィヒテにおける主體性の主意主義的熾烈さは、社會の物體的側面を、正にそれが物體的であるといふ理由で、可成り無難作に拒否されるべきものとしたのであらう。これは謂はゆるドイツの慘さのフィヒテ的表現に外ならぬではないか。こゝからして封鎖商業國家論の社會主義的強制とローマン的色調との性質が理解されなければならぬ。

計畫經濟思想史の一節として見た本書の意義は右の一點に盡きると思ふ。これを倫理的社會主義の勞作として、或ひは國民社會主義の草案として讀み取らうとする試みには、一應の理由

はあるにはあるが、それ故にこそ必ずしも深いフィヒテ理解が
潜むとも思はれない。これらの解釋は寧ろ眞のフィヒテ研究に
よつて反批判さるべきものであらう。それは兎もかく、夙に邦
譯さるべくしてされなかつたこの古典的名著が、出口氏の良心
的な努力によつて、初めて日本語に移されたことは喜びに堪え
ない。殊に長文の解説を附けられたことは有益であつた。本譯
書についてはすでに大阪商大立野保男氏の周到にして興味深き
紹介もあることであるから（經濟學雜誌三ノ五）、こゝではたゞ
問題把握のための一視點を提供するに止める。

（譯者序言六八頁、本文二二八頁、弘文堂）